㊾ ソグド字にては[illegible]、回鶻字にては[illegible]、Radloff 氏の表にはソグド字のβを載せず。

㊿ ソグド字にては[illegible]、回鶻字にては、[illegible]、終に來る時は[illegible]。

(51) ソグド字のsは[illegible]、šは[illegible]、回鶻字のsとšとは前に記せるが如く殆ど區別無くして僅少の場合にsは[illegible]、šは[illegible]と書かる。

(52) Sitzungsberichte d. k. p. A. 1910, S. 307—312.

(53) Beginings of Writings in C. and E. Asia, 121—2, & 17.

(54) Rémusat, Recherches sur langues Tatares, p. 294—5.

(55) Lacouperie 氏は又上に引きたる書の一二二頁に於て隋書卷三十五の二一—二二枚に、魏の太武帝の時(四二四—四五一年)支那の佛僧は中央亞細亞に於て只だ十三字母より成れる文字を修得せる旨が記載せらると述べたれど、隋書の指示せられたる場所には斯る記事は存せず、必ず氏の誤解か、或は氏の此の著書中に屢〻存する例の如く、他人の論著より重引したるに基く誤なるべし、Donner 氏は更に此の記事を引用して其の Sur l'origin de l'arphabet turc なる書の一八頁に於て、此の十三若くは十四より成れる胡書は、ネストル教徒の用ゐたるシリヤ文字にして、既に五世紀に於て之が Kashgar, Karashar, Khotan を經て高昌の Uigur に至る迄擴れるものなりとの結論に達すと說き、又其の一九頁に於て、此等十三或は十四より成れる文字は、後に變化して回鶻文字と呼ばれたるシリヤ文字と想像するの外無しと說けり。

(56) Marquart, Die Chronologie der alt. Inschriften, S. 56. Do., Eranšār, S. 60.

(57) 大谷勝眞氏「窣利に就きて」(史學雜誌第二十四篇一五六八頁)

(58) Andreas, zwei sogdische Exkurse zu V. Thomsen. Sitzungsberichte d. k. p. A. 1910, S. 308. 氏の說によれば surd の γ は先づ h に變ぜられ同時に前の母音が擴がれるが爲に此の音は消滅し並びに d は l に變化したるならんと云ふ。

(59) Beginings of writings, p. 125.